援助モダリティ勉強会
第 2 回議論のポイント

【日時】2004 年 4 月 21 日(水) 12:30〜14:00(BBL 形式)
【場所】JICA 本部会議室
【参加者】GRIPS 開発フォーラム、JICA 職員有志（10 名）

発表者より、予備調査出張のファインディングに基づき援助モダリティの議論の整理を行い、我が国の援助モダリティ組み合わせの諸相につき他ドナーの取組みも踏まえて説明。主なコメントは以下のとおり。

援助のあり方に対する原則（レジメ III-1.）

- オーナーシップを誰のものと考えるかは要検討。政府レベルとするのか、市民社会まで含めるのか。また、政府レベルでも DfID や世銀は財務省を主体に、日本は（しいて言えば）計画省を中心に考える傾向がある。これに対し、politics に入り込む話なので、今回の調査研究のスコープに入れることは難しいのではないか、との指摘もあった。
- Aid effectiveness あるいは efficiency は原則の中に入らないのか。（当方より、これらは原則の上位にあるものではないかとコメント。）

プロジェクトの概念（レジメ II-2.【ケース 3】）

- プロジェクトは２次元図において介入する領域の範囲、あるいはやり方（PMU の設置の有無など）という意味でも幅がある概念で整理する必要あり。活動内容について言えば、革新的な取組みやテクノロジーを試験的に支援する場合、プロジェクトに比較優位がある。
- プロジェクトの定義はリソースと時間の有限性（resource & time-bound）。プログラムになるともう少し広くなる。ただし最近では、援助の効率性･効果向上の観点からプロジェクトがプログラム全体にはめ込まれる（programme-based project）場合も増えている。
- プログラム･アプローチでは「仕組み」づくりはできるが、「キャパシティ」がない、というのが現状。（結局、実施を担っているのは月給 3,000 ドル程度で雇われたコンサルタントという場合もある。）

開発課題の領域についての 2 次元の図（レジメ II-1.）

- 座標軸の長さに意味を持たせ、各象限の面積に違いをつけては如何。プロジェクト（第 3 象限）の領域はより広い可能性がある。
- 第 3 象限の外に広がる民間セクターとの関わりについて。政策･制度といった上流部分とのリンクを経ずに援助プロジェクトが民間セクターに便益をもたらした成功例は、いくつかの例外を除いて数少ない。
- これは on-budget を意識して、資金の流れと計画に焦点をあてた図。但し off-budget といっても、MTEF などを通じて計画段階で把握される場合もある。

世銀の”Emerging Partnership Model”（レジメ IV-1）

- これはアフリカを対象にした図で、high performers の次のステージである援助依存度が低い国は対象外である。かかる国では、特定の分野に対する TA などのニッチ･アプローチが可能であろう
- それはつまり自分で必要とする支援の TOR を策定できるということであるが、このモデルの high performers であっても TOR 策定能力には疑問が残る。その状態でプーリング･ファンドのような TA に移行することが果たして現実に即して妥当な想定なのか、疑問がある。
- Lower-end countries→high performers に加え、オーナーシップの軸も必要ではないか。オーナーシップを動態的なものととらえ、援助モダリティがオーナーシップに影響を与えるという視点が必要。

（以上）